

県立大との連携強化

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

病院が看護学実習の場を提供し、看護の専門性を高めるために看護師がさらに大学院で学ぶ。看護師の育成と看護の質向上という共通目標のもと、交流を図ってきた県立中央病院と県立大。新年度からは、医師が臨床教授として大学院の教育に携わり、共同研究を行うなど、さらなる連携強化を目指す。

看護学部がある県立大池田キャンパスと県立中央病院は、荒川を挟んで500mほどの距離。立地条件も生かし、看護師を育成する場、看護を実践する場として互いに交流を深めてきた。

同大看護学部長の流石ゆり子教授によると、学生の実習先の約8割が同病院。病院、大学はそれぞれ実習委員会を設置し、よりよい実習環境の提供に努めているほか、定期的に「連絡会議」を開いてさまざまな情報交換を行っている。

《 63 》

共同研究で看護の質向上へ

る。

同大は3年ほど前から実習病院の看護師に、中心的に学生の指導に当たってもらう臨床講師を任命し、実習指導体制の充実を図ってきた。来年度からは、同大学院が県立中央病院の医師8人を臨床教授・准教授に任命し、大学院で講義をしてもらう。「慢性疾患患者へのセルフケアサポートのシステム構築」「周術期の疼痛管理」

などをテーマに医師・看護師と共同研究も行う予定だ。

「臨床現場と研究機関それぞれの強みを生かし、実証研究を積み上げていくことが看護の質向上につながる」と同大看護学研究科長の遠藤みどり教授。「学生には現場で実践力や最新の医療技術を身につけてほしい」と期待する。

同病院の植田美由紀看護部長も「大学での基礎教育、病院での現任教育の連携強化を進めることで人材育成を図りたい」と話す。また学生時代から現場をより身近に感じ、看護の魅力を実感することで看護師確保や離職防止にもつながりたいと考えた。



来年度の連携について話し合う(写真右から)県立中央病院の植田美由紀看護部長、県立大の流石ゆり子教授、遠藤みどり教授
＝甲府・県立中央病院

現場で働く医師や看護師にとつても研究機関である大学との交流はモチベーションを高め、キャリアアップにつながるメリットがある。付属ではない独立した大学と病院の連携は全国でも珍しいという。新たな連携のモデルケースとして注目されそうだ。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します